

博物館から東に向かって歩くと、石垣の広がる風景を眼にすることができます。八代城跡は八代地域に暮らす私たちの日常風景であり、当然そこにあるべきものとして存在しています。しかし、現在の私たちが八代城の石垣を眼にすることができるのは、単なる偶然ではありません。そこには、歴史的な意図が介在しているのです。

元和元年（一六一五）、徳川幕府は一国一城令を発令し、大名領主の居城を除いた城の破却を命じます。当時、八代城は熊本城を居城とする加藤忠広の支城でした。よって、八代城は本来ならば破却されるべき城だったということになります。しかし、八代城は残されました。なぜ、八代城は残されたのでしょうか？

従来の研究では、八代城が「薩摩の押さえ」として重要だったから残されたのだと理解されてきました。つまり、関ヶ原合戦（一六〇〇年）で石田三成に味方した薩摩国（島津氏）は、徳川幕府にとっての仮想敵国であり、八代城は薩摩国との「もしもの戦争」に備えて残されたというわけです。

ただし、それだけでは説明できないこともあります。たとえば、一国一城令が発令される前、肥後国には薩摩境目の城として佐敷城がありました。この佐敷城は一国一城令で廃城になるまでのあいだ、薩摩軍の侵攻から肥後領国を守る防衛拠点としての役割を果たしてきました。「薩摩の押さえ」だけが目的ならば、八代城ではなく佐敷城を残してもよかつたはずですが。

確かに江戸時代の史料をいくつか読んでみると、「八代

は薩摩国に通じる要衝である」と記されています。しかし、これらの史料は八代城が熊本藩最南端の城となったのちに書かれたものです。このことに着目するならば、

八代城が「薩摩の押さえ」であるという観念は、八代城の存続が決まったのちに形成されていったものであるという理解も可能となってくるのではないのでしょうか？つまり、八代城は「薩摩の押さえ」として重要だったから残されたというよりも、ほかの薩摩境目の城が破却されたために、「薩摩の押さえ」として重要な城になってしまったということなのです。本展覧会は、以上のような視点から、八代城の歴史的な位置付けを再考しようというものです。「なぜ、八代城が残されたのか？」という問題に必ずしも答えるものではありませんが、八代の歴史に新たな視点を加えることができればと考えています。

なお、展覧会の会場には、江戸時代の人々が八代城をどのように位置付けていたのかを示す資料を展示しています。これらの資料は、八代城が熊本藩最南端の城となったことで、「薩摩境目の城」と意識されるようになったこと、また、八代城下に暮らす人々が「もしもの戦争」に備え続けなければならなくなったことを教えてくれます。ただ、資料から得られる答えは一つではありません。展示を通して、観覧者の皆様一人一人が、自分なりの答えを見つけていただければ幸いです。

## なぜ、八代城か？

文＝林 千寿

